

柳川さんのこと

田丸徳善

(昭和28年卒業)

柳川さん(しばらく、こう呼ばせていただくことにする)が定年を迎えられる。当然のことながら、これはずっと以前から分っていた。そして、それなりに心の用意はしてきたつもりである。だが、いざその時が近づいてみると、この大きな変化に一体どうやって対処したらよいか、われながら心もとない気がしてくる。今から、柳川さんのいない研究室を想像するのは、必ずしも容易ではない。それほど、その存在感が大きいのであろう。

研究室の中で過ごされた時間の長さを考えれば、これはある程度、理解できないことではない。岸本先生に嘱望され、それまで勤めた正則高校を去って助教授として着任されたのは、ようやく30才台の半ばであった筈である。31才で教授となった姉崎先生、33才で助教授に就任した石橋先生などを別にすれば、これはかなり早いといって差支えない。とくに、昔とは違ってスタッフの高齢化の傾向がみえる最近の文学部では、なおさらである。それいらいの約四半世紀をつうじて、柳川さんの歩みは、文字どおり研究室とともにあったのである。

この間には、もちろん、いろいろのことがあったが、今でも鮮かに思い出されるのは、昭和37(1962)年の夏の一日のことである。柳川さんは、その年の8月から1カ年、ハーバード大学へ留学することになっていた。後になって自ら書かれた「SR 112の記録」(『宗教と正史』所収)によると、悲愴な心境だったとあるが、そうした気配は少しも感じられなかった。むしろ、その当時、精力的に取組んでいたパーソンズの宗教社会学をじかに吸収すべく、意欲に燃えておられたようである。不安だったのは、却って、外から戻って助手になったばかりの私自身の方だった。当時、岸本先生は殆ど図書館に行ききりで、研究室は少し手

薄だったからである。

とにかく、その柳川さんを送る内輪の送別会が横浜で開かれた。誰が言いだしたのか、さだかでないが、多分、横浜在住の川又志朗氏が世話役だったかと思う。まだ年少のお子さんともども、柳川さん御一家を中心に、十数名が集まり、タワーに上ったり、山下公園の氷川丸を見学したりした。クライマックスは、その頃まだ珍しかった水中翼船なるもので、港の内外を周航したことである。空はまぶしいばかりに青く、水しぶきは白かった。そして、盛り沢山のプログラムの後は、一同でグラスを合せ、食事を共にして別れたように記憶している。

海外に出かける機会が飛躍的にふえた近年では、こうした大がかりな送別会など、あまり聞かないけれども、当時としては必ずしも異例ではなかった。だが、そのことを差引いても、あの一日は何か特別の意味をもっていたように思われる。つまり、それは送別会であるとともに、デュルケム流に言えば、また柳川さんをめぐるグループの、結びつきの表現としての「まつり」でもあったのではないだろうか。その後も、この種のまつりは、いろいろな機会に形をかえて繰返された。

この四半世紀ほどを振り返ってみると、柳川さんの周囲には、いつも多くのすぐれた人材が集まっていたことに気付く。人呼んで、時にこれを「柳川シュール」とも言う。およそシュールなるものが形成されるには、いくつかの条件が必要である。例えば、比較的に近い関心をもった、同じ世代の集団の存在ということはその一つであろう。しかし、それだけでは十分ではない。シュールには、何よりもすぐれた指導者が不可欠である。

かつて堀先生を追想して、柳川さんはほぼ次のようなことを書かれた。今までの研究室の先生方は、概して言えば父親型の、つまり厳しく命令す

る家父長的な指導者であった。それに比べると堀先生はマザズ・ブラザー，すなわち母方の叔父のような優しい方であった，と（1974年9月8日，成城大学葬のパンフレット）。だが，その柳川さん自身は，一体どのように形容したらよいのだろうか。

たしかに家父長型ではない。そもそも，ただ厳しいだけの指導者は，現代ではすでに時代遅れのように見える。かと言って，マザズ・ブラザーと

いうのも適切とは思えない。もし敢えて言うなら，先達型とでも呼べるのではないかと思う。あくまでも仲間の1人であり，仲間と同じレベルに立ちながら，しかも一歩を先んじて，仲間を導いていく——これが先達である。親しみがもてるとともに，頼りになる。柳川さんはそういう人であったと思うし，これからもずっと，そうであっていただきたいものである。